上条「こいしは・・絶対助ける!!」

チルノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
上条「こいしは・・絶対助ける！！」

【Ｎコード】
Ｎ６３８８Ｖ

【作者名】
チルノ

【あらすじ】
上条さんに土御門からの依頼博麗神社という神社の結界を破壊してほしいとのこと実際に上条さんがそれを破壊すると上条さんは幻想卿に迷い込んでしまい、古明地こいしと出会う。
そこから、上条さんがフランと遊んだり、ツイスターでにとりと勝負したり！？

（前書き）

どうも、チルノです今回はガタガタなクロスを描かせてもらおうと挑戦した次第です。
東方と禁書のクロスは思い付きですかよろしくお願いします。ところどころ此処おかしいんじゃない？と思った人は脳内補完でお願いします。

・今回は、趣向を変えて禁書と東方のクロスで行きたいと思います。
・カップリングとしては・・・上条×フランまたは上条×さとりｏｒこいしってとこかな・・
まあ、書いてる途中で決めますそこんところはよろしくです。一応、多くの東方キャラ出したいな！！
ではどうぞ！！

上条当麻は現在戸惑っていた。

上条「えと・・どうすれば・・あれぇ？」アタフタ

上条の目の前ある長い階段がその原因、時は数時間前にさかのぼる
――――

上条「あ？博麗神社？なにそれ？」

土御門「前々から、そこで神隠しに会うって奴らが多くいたんだにゃー、そこでこっち側の魔術師を送り込んで調べたところ何かしらの結界があることに気付いたぜよ。」

上条「ん？それを俺に壊せってこと？」

土御門「ありていに言えばそうだにゃー、まあ何が起きるかわからないから俺やねーちん、ステイル天草式も同行するぜよ。」

上条「そうか、まあいいけど。でいつ行くんだ？」

土御門「今から」

上条「はあ！？」

土御門「さあ！行くぜよ！！！」

ばばばばばばばばばばばばばば！！！！！！

大きな音がなると同時に目の前にヘリコプターが現れる。土御門は上条をそこへ放り込み自分も乗り込んだ。するとヘリはそのまま飛び去って現在の場所まで上条を運んだ。

――――現在

上条「はあ・・とりあえずこの階段を上るか・・」テクテク

上条は階段を上る長い階段を、階段の中場あたりで”パキィン”と音が鳴る。

その音に反応して待機していた神裂達が一斉に飛び出してくる。そこで神裂達が見たのは。

神裂「上条当麻が・・消えた？」

誰もいない階段が続いているだけだった――――

場面は変わって幻想卿

霊夢「！・・一瞬だけど結界が歪んだわね・・幸いすぐに再生したみたいだけど、代わりになにか入ってきたわね」

霊夢の顔が少しばかり曇る、しかし

霊夢「ま、大したことないでしょ。異変が起きたら私が動けばいいしね」ズズ・・

すぐに、元の顔に戻りお茶をすする。

霊夢「確か、地霊殿の辺りだったと思うけど。大丈夫かしら？入ってきたのが人間だったらさとりがなんていうか・・私は行かないけど」

霊夢さん・・そりゃないぜ・・とまあそんな感じで上条さんは幻想卿に入ってきた。地底だけど

上条「いてて・・いきなりなんか壊したか！と不安になったと思えばこんな薄暗いとこに来ちまったし・・不幸だ」キョロキョロ

上条「にしても、ここどこだ？太陽が無いからどっかの地下だと思うんだけど・・」

？？「（あの人、いきなり現れたなあ・・だれだろ、見かけない人。無意識操って驚かせちゃおう！）」

と、上条に真正面から近づく人影

??「（こうやって、真正面から歩いて行っても気づかれない！ふふふ、楽しいな♪）」

上条「あの、ここってどこか知ってます？」

こいし「うひゃあ！！？え？なんで？今の私に言ったの？」

上条「え？そうですけど・・？」

こいし「あれ？あなた私が見えてるの？」

上条「え？うん、普通に」

こいし「あれ～？どうしてだろ・・ちゃんと無意識を操ったハズなのに・・」シュン

上条「あれ？どうした！！？なんか、悪いことした？」アタフタ

こいし「いや、なんでもないよっ♪ところでお兄さんだれ？何しにこんなとこまで来たの？」

上条「あ・・ああ、俺は上条当麻。何しに来たってわけじゃないが、気が付いたらここにいたんだよ・・」

こいし「ふ～ん、わたしは古明地こいし！わたしはちょっと家を抜け出して散歩してたところなの。よかったら、家に来る？多分、手助けになると思うよ！お姉ちゃんは凄いから！」

上条「こいしか、いい名前だな！ほんとか？じゃあ、是非頼むよ。」

こいし「うん、ついてきて！」～♪

こいしはかなり楽しそうだった、なぜなら自分の能力が通じない相手は初めてだったから。もしかしたら、これから楽しそうな展開になるかもしれない！と内心上条に惹かれていたのだ。

・・・地霊殿

さとり「・・・（あの子、どこに行ったのかしら）」テクテク

柱の陰

こいし「ここで待ってて、ちょっといたずらしてくるから！」ボソ

上条「いたずらって・・まあ、いいか行って来い」ボソ

上条「（あれがこいしのお姉ちゃんか・・あんまり似てないけど仲よさそうだな・・）」ニコ

上条は、目の前のいたずらする妹とされる姉をみてほほえましいなと思った。

そんなことを思っているうちにこいしは姉に近づく。

こいし「・・・♪」バッ

さとり「（あの子に少し用があったの――――！？）」バッ

こいし「おねええええちゃああん！！！」ガバッ！！

ズッテ――――ン！！

大きな音とともに二人とも倒れ込んだ。

こいし「えへへ、お姉ちゃん大丈夫？」

さとり「・・・」

こいし「あ・・あれ？お姉ちゃん、怒ってる？」

さとり「・・・」

こいし「・・・・？」

様子がおかしいので、よく見てみるとさとりは目を回して気絶していた。

こいし「・・・テヘッ♪」

上条「テヘッ♪じゃありません。何やってんですか？こいしさん・・」

こいし「ん～、やりすぎちゃったかな。あとで謝んないとね！」

上条「そうだな。さてどうするよこの状況・・」

こいし「う～ん、部屋に運ぼうか。ここにほっとくと霊達がいたずらしそうだし・・」

上条「霊達・・？まあ、いいか・・んじゃ、俺がおぶってくよ。案内してくれるか？」

こいし「うん！」

上条は、さとりを背負って立ちあがる。

上条「なあ、こいし。ここっていったいどこなんだ？」

こいし「えとね、ここは幻想卿って世界で・・わたしたちがいるのはその幻想卿の中の地底で、ここはその地底の中の地霊殿って所だよ。」

上条「なんで、俺はこんなところにいるんでせう？」

こいし「お姉ちゃんに前聞いたことがあるけど、たまに人間がこの幻想卿に迷い込むことがあるんだって。」

上条「俺も、その一人って訳ですか・・」

こいし「だと思うよ？」

歩きながら、こいしと上条は色々なことを話す。ここ幻想卿に博麗の巫女と呼ばれる人がいる事。地底の中で地霊殿の主が上条の背負っている古明地さとりであること、この幻想卿には妖怪や妖精などがいて、人も含め様々な能力を持っていること。話しているとそこで、

上条「ん？」

さとり「ん～・・ここは・・」

こいし「あ、お姉ちゃん目が覚めた？」

さとり「あ！こいし！！さっきはよくも！って・・あなたは？」

上条「ああ、俺は上条当麻。こいしにここへ案内されてきたんだ。」

さとり「そ・・そう、って！え！？あれ！？なんで私貴方におぶられて・・ええ！！？／／／／」

上条「ああ、こいしのいたずらで気絶したもんだから部屋に運ぼうとしてたんだっと立てるか？」

さとり「え・・・ええ・・ありがとう／／／」もじもじ

こいし「あ、お姉ちゃん顔赤いよ？どうしたの？」

さとり「な・・なんでもないわ！！／／／」ぶんぶん

上条「俺は、なんかここに迷い込んだみたいなんだけど・・帰る方法とか知らないか？」

さとり「え・・ええ、私は・・ちょっと知らないわね。」

そこで、上条は少し落ち込むがそんな余裕は、すぐに無くなった。

ごっしゃああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！

と大きな音が建物中に鳴り響いたからだ。

上、こ、さ「！！？？」

上条「なんだ？今の音！？」

こいし「お姉ちゃん！！」

上条「！！！？」

上条が振り向くとそこには大きな口と鋭い牙や爪、そしてなにより大きな黒い翼をもった龍の様な妖怪がいた、しかし上条の目にはそんなことは写らずその妖怪の手元が写る、そこにはとらえられたこいしがいた。

上条「こいし！！！」

さとり「くっ！想起”テリブルスーヴニール”！！」

さとりは、弾幕を瞬時に放つしかし多少当たっただけでその黒い妖怪はダメージがなさそうだったその妖怪、ここでは黒とする。黒はさとりの弾幕をそっくり真似して返してきた。

さとり「！！？」

当たると思った、さとりは避ける事ができない。すると目の前に一人の少年が立ちふさがる。

パキイン！！！

甲高い音とともに弾幕が消える。

さとり「なっ・・あなた！！」

何か言おうとしたが、黒は追撃する次は尻尾を振りまわして攻撃してくる。

上条「くっ・・がああああ！！」バキッ

さとり「あっ！っこの！！こいしを返せえ！！」ドドドドドドドド！

上条「がっ・・こいし・・さとり・・」ググッ・・

上条は、立ち上がろうとするが体に力が入らない、さとりをかばって直撃を食らったからだ。

上条「くっそ・・またかよ、また守れねえの・・か・よ」

そこで、上条の意識は切れた・・

上条「ん・・あれ？・・ここは」

さとり「目が覚めましたか？」

上条「さとり・・？はっ！さとり！こいしは！！？」

さとり「・・・こいしは、残念ですがあの黒い妖怪に連れ去られてしまいました・・」ぽろ・・

上条「それで・・あいつは・・？」

さとり「あの黒い妖怪は飛んでいく際この手紙を残して行きました。要約すると・・2週間以内に取り戻さないと・・こいしは・・こいしは・・！！」ぽろぽろ

上条「・・さとり、泣きたいときには泣いてもいいんだ。今は泣いとけ・・」ぎゅ

さとり「う・・う・・うわあああああああああああああああん！！」ぽろぽろ

さとりは、上条に抱きしめられたとたん糸が切れたように泣いた。たった一人の妹を守れなかった悔しさ、死んでしまうかもしれないという不安が一気に爆発した。

上条「さとり・・俺もこいしを探すの、手伝うからさ。絶対助け出して見せるから。」

さとり「うっ・・うっ・・グスッ・・はい・・！」ぽろぽろ

上条「こいしもお前を待ってる、頑張ろうぜ？」ニコ

さとり「っはい！！」

さとりは、上条に背中を押されもう一度あの黒に牙をむく。その顔は地霊殿の主古明地さとりの決意の表情だった。

上条「とりあえず、俺は地上に行ってみるよ。さとりは地底を探してくれ。地底の事ならさとりのほうがよく知ってる。」

さとり「わかりました。ところで、貴方の能力の事なんですが・・」

上条「俺の？」

さとり「はい、こいしが無意識を操る程度の能力であるようにわたしにも意識を読み取る程度の能力があります、しかし私にも心を読めない相手もいます。それは無意識の行動をとるこいし。それ以外は今までいませんでした。しかし今わたしは貴方の心が読めないのです。なのであなたもなにか能力を持っているのでは？」

上条「ああ、俺もそういう能力を持ってる。んとこっちの言い方だと能力を消す程度の能力・・・かな？」

さとり「能力を？」

上条「ああ、実際こいしに会った時も無意識を操ろうとして失敗したらしいし。」

さとり「能力を消すって・・つまり私は、もう心を読むことができないってことですか？」

上条「ああ、いやそれは大丈夫だ俺に対してその能力は効かないだけだ、俺がお前に触れていればその間能力は使えないんだろうけど。」

さとり「そうですか・・わかりました。では、地上まで案内します。」

上条「ああ、よろしく頼む。」

さとり「とりあえず、私との連絡が取れるようにお供をつけさせます。」

上条「ああ、分かった。」

お空「よろしくね！」

上条「ん？お前が俺のお供って奴か？」

お空「うん、お空って呼んでね！」

上条「よろしく！」

上条は、そのあとお空とともに地上へ出た

・・・こいしが殺されるまであと2週間

上条「ん～さて、まずはどこへ向かうかな・・」

お空「ん～さとり様に聞いたところによると、相手は黒い妖怪だったらしいから・・紅魔館ってとこに行ってみない？」

上条「紅魔館？たしか、こいしに聞いたな吸血鬼のいる屋敷だったか・・」

お空「うん、なにか知ってるかもしれないよ？」

上条「いってみるか！」

上条とお空は紅魔館に向かって歩き出したしばらくして見えてきた

のは湖だった

・・・湖・・・

上条「ここは・・湖か、さてとちょっと休んでくか。」

お空「そうだね。」

??「ん?お前達だれだー?」

??「人間?」

上条「ん?おお、誰だか知らないが・・俺は上条当麻、でお前は?」

??「わたしはルーミアっていう。ところでお前は食べてもいい人間かー?」

上条「えっ?人間は食べちゃいけないと思うんですが!?」

ルーミア「そーなのかー?」

上条「そうそう」

ルーミア「でもツンツン頭は食べてもいいって誰かが言ってた気がするぞー」

上条「って誰だそんなこと言ってんのは――――!!?」

ルーミア「闇符”ディマーケイション”!!」

上条「なんだ!?さとりと言ってたスペルカードって奴か!!?」
上条は、それを右手で打ち消す。しかし消したそこにはルーミアが鋭い目で襲いかかってきた。
上条「こ・・の!!」ヒュ
上条はルーミアの突進を足を引っ掛けて転ばせる
ルーミア「いてて・・」
ルーミアが再度襲いかかろうとした時
??「あーーー!!何してんの!ケンカ?あたしも混ぜてーー!!」
と空から幼い声が降ってきた。ルーミアと上条は空を見上げるとそこには青い氷の羽根と青い服を着た女の子が飛んでいた。
ルーミア「チルノちゃん?」
上条「チルノ・・?」
チルノ「お前だれだ?見かけない奴だな!!さては、最強の座を狙った馬鹿だな!」
チルノ「どう?このめいすいり!あたいってばさいきょーね!!」
フフン
上条「え〜と、違うな残念ながら・・」

チルノ「・・・」

上条「・・・」

チルノ「・・・っこの!!バカにしやがって――!!しょーぶしろ!しょーぶ!!」

上条「なんだか、ビリビリみたいなやつだな・・」

チルノ「喰らえ!氷符”アイシクルフォール”」

上条「うおっと・・あれ?」

チルノの攻撃は目の前の上条には当たらなかった。そう、チルノの攻撃に対しては目の前にいる事は安全地帯にいる事になるのだ。

チルノ「くっそーー!へんてこな能力使ってるなーー!!」ぷんすか

上条「お空!そろそろ行こうぜ!逃げんぞ!」

お空「あ、終わった?分かった行こう」

チルノ「待て――!!」ぷりぷり

・・・少年&少女逃走中

上条「はあ・・やっとまいたか・・」

お空「そんなことよりほら着いたよ。紅魔館」

上条「これが・・ってでけえなあ・・真っ赤だし」

上条「ん？あそこに門番がいるな・・・ん？寝てる・・よしお空気づかれないように俺を抱えて飛んでくれ、んで紅魔館に侵入する。」

お空「分かった」ふわっ

・・・・

上条「っと、侵入完了っと」スタッ

フラン「なにしてるの？」

上条「って、早くも見つかったし！早いよ！」

フラン「ねえねえ、何してるの？あなただあれ？」

上条「ああ、俺は上条当麻、お前がここの吸血鬼ってことで間違いないか？」

フラン「うん、あってるよ！でもこの紅魔館の主はお姉ちゃんだけどね。」

上条「お姉ちゃん？（なんかこいしと似たような子だなこの子）」

フラン「うん！あ、わたしはフランドールって言うの！フランでいいよ！ねえ、そんなことより遊ぼうよ！！」

レミリア「あ、そんなところにいたのフラン？何してるの？って貴

方・・誰？」ギロ

上条「・・っ・・上条・・当麻・・」

レミリア「で？何してるの？ここで・・」

上条「（どうする・・こいつの殺気半端なくヤバい・・）」

上条「あんたに用があってきた・・聞きたいことがある、質問が終われば出ていくさ。」

レミリア「そう・・でも、私には貴方に用はないわ。そして・・生きて帰れるとでも思ってるの？人間が・・」

上条「頼むよ！なんでもするからさ！！少しの間俺の質問に答えてくれればなんでもする！！」

レミリア「・・・なんでも、と言ったわね・・」

上条「ああ！！」

レミリア「じゃあ、フランの遊び相手を今日1日して頂戴、あの時計が5時になったら私の所に来なさいそうしたら、質問に答えてあげる。無事にこれたらね。じゃあ、頼んだわよ。」

上条「え？それでいいのか？分かった！」

フラン「ん？お兄ちゃんフランと遊んでくれるの？」

上条「ああ！今日1日遊んでやるよ！（お空、お前今日は一人でこ

いしの情報を集めてくれ。ひととおり終わったら、さとりのとこ戻れ俺も終わったら戻る。）」

お空「（ああ、わかったよ）」バサ

上条「で、何して遊ぼうか？」

フラン「弾幕ごっこ！」

上条「弾幕ごっこ？なんだそれ？」

フラン「え～と・・・かくかくしかじかってルールだよ！！」

上条「分かった、俺スペルカード持ってないし、弾幕も打てないけど頑張るよ。」

フラン「行くよ！！禁忌”クランベリートラップ”！――――――」

上条とフランはその後５時までの４時間、ずっと戦(あそび)い続けた、上条はその右手でフランの弾幕を消して、避けてを繰り返し、たまにフランに攻撃としてこけさせたり、木にぶつかるように逃げたりしてダメージを与えた、そして――

上条「だあああ！！くそ！まだかよ５時は！」ギーンギーン！

上条「！？５時だ！フラン！もう遊びは終わり！！さあ、帰るよ！！」

フラン「え～、もう終わり～？もっと遊びた～い！」

上条「また今度、遊んでやるから！今日は終わり！」

フラン「ほんと！？じゃあ、分かった！約束だよ！」

上条「おう！約束だ！」

咲夜「お嬢様、妹様と例の侵入者を遊ばせているようですが、大丈夫でしょうか？」

レミリア「フランに、やられて終わりよどうせ。もう5時だし来れたら大したもん「来ぞォォ！！」・・よ・・」

上条「ああ！疲れた！でも、ちゃんと遊んでやったんだから、質問に答えろよな！」

上条の姿は、服がところどころ破けていて多少血も出ている。しかしここまでやってきた、約束通り5時にここへレミリアの場所までやってきたのだ。

レミリア「貴方、フランとどんな遊びをしたの？まさか、ままごととか言わないわよね？」

レミリアは、フランが弾幕ごっこでこの男を壊すと考えていたのだ、しかし上条はやってきたことで、弾幕ごっこをしたのではないのでは？と考えた。

上条「あん？弾幕ごっこだよ！弾幕ごっこ！！てかなんだあの強さ！さてはお前遊びとか言ってフランに俺をやらせるつもりだったろ！！」

上条が無駄にテンションを高くしてぷんすか怒っている。しかしレミリアは呆然としていた、この男はあのフランと４時間もの間弾幕ごっこをしていたと言うのだ。

フラン「あ、お姉ちゃん！」

レミリア「フラン！本当にこの男と弾幕ごっこをしてたの？」

フラン「う・・うん！楽しかったよ！すごいんだよ！わたしの弾幕もスペルカードも全然効かないんだよ！」

レミリア「弾幕が、効かない？」

上条「もういいだろ！質問に答えろよ！約束だろ！」

レミリア「そうね・・いいわ、質問に答えてあげる。何が知りたいの？」

上条「地底に、黒い龍の様な妖怪が出た、そいつについて知っている事はないか？あと、地霊殿の古明地こいしってやつがそいつにさらわれたそっちについても知りたい。」

レミリア「ふむ・・確かに・・そういう妖怪の目撃情報なら知ってるわ。たしか・・妖怪の山だったかしら？あとこいしって子については知ってることはないわ。悪いけど」

上条「妖怪の山・・分かったありがとう。」

レミリア「あ、あのさアンタまたここに来なさいよ。フランの遊び

相手にちょうどいいわ。」

上条「・・正直、あれ結構きついぜ？」

フラン「ふふん！ほめられたよ！お姉ちゃん！」

上条「はは・・まあ、気が向いたらまた来るよ。フランともまた遊ぶって約束しちまったし。」

レミリア「そう、ではまたね。上条当麻。」

・・・紅魔館前・・・

上条「ふう・・とりあえず地底に戻るか。」

・・・地霊殿内・・・

さとり「妖怪の山に？」

上条「ああ、今日紅魔館に行ったところ、レミリアがそこであの黒い妖怪が目撃されてるって言ってたぜ。」

さとり「そう・・地底の方は何の情報も無かったし・・」

上条「明日は、さとりも地上の妖怪の山に行ってみないか？」

さとり「ええ、そうね。分かったわ行きましょう。」

上条「今日は休もうぜ。俺もここで寝かせてもらってもいいか？」

さとり「え！？ここで！？べべべ別にいいけれど！？／／／／」

上条はこの地霊殿で・・と言ったつもりがさとりには自分の寝室を指していると聞こえた。

上条「ありがとう！さとり！」

さとり「・・・／／／／」ぷしゅ～

こうしてこいしを助けるための二ヵ月が始まった――――1日目終了

翌日

とある場所

？？「ふん、古明地さとり。いまこそ貴様を地獄に叩き落す時だ・・・！！」

こいし「お姉ちゃんをどうするつもり！？あなたはだれ！！？」

？？「ふん、古明地こいし俺はお前を知っているしかしお前は俺の事を知らない知る必要もない。」

こいし「とーま・・お姉ちゃん・・グス」

妖怪の山

上条「だから！この先に用があるんだってば！！通してくれよ！！」
？？「だめだってば！いくら盟友でも今この先は危険なんだ！通すわけにはいかないの！」
さとり「・・・」
上条達は、騒いでいた。どうやら妖怪の山に入ろうとしたところ、一人の少女に邪魔されているらしい。
少女の名前は河城にとり人間と盟友関係にあるカッパの妖怪だ。
上条「だから、この先が危険なのは百も承知なの！通してくれよ・・・」
にとり「通すわけにはいかないね・・力づくでもね・・！！」
さとり「・・・まだ終わらないの・・？」
上条「よし！じゃあ、勝負しよう！！」
にとり「いいよ！じゃあ、私の作ったゲームでバトルだ！！見よ！名付けてツイスターゲーム！！」バーン
上条「」
さとり「当麻！ここは私がやります！！」
上条「お・・おお、どおした？急に・・？」
さとり「なんか、楽しそうなので。」

にとり「どっちでもいいよ！さあやろう！！」

上条「んじゃあ、俺が指示するぞー」

・・・１０分後・・・

にとりさとり「うぐぐぐ・・んっ・・」はぁはぁ

にとり「負け・・ない・・よっ・・！」はぁはぁ

さとり「私・・だっ・・て・・！」はぁはぁ

上条「（なんかエロいぞ・・）」ゴクリ

上条「それじゃ、次・・・にとり右足、青」

にとり「ふぅぅぅう・・！！」ググッ

にとりは、ゆっくりと右足を青に移動させる。ブリッジの体制なのでかなりきついだろう。

上条「・・・よし、次・・・さとり左手、黄色」

さとり「んっ・・はぁ・・ここに・・」ググっ

さとりは両手が交差している状態からにとりの足をくぐり左手を黄色に置く。

にとり「ああ・・！！やばいやばいやばい！！あああ・・・！！」

ドテッ

そこで、にとりの体制が崩れる勝利はさとりに訪れた。

にとり「まさか、自分の発明したゲームで負けるとは思わなかったよ・・・」トホホ

さとり「やった！やりましたよ！当麻！！」ピョンピョン

さとりは、当麻に抱きつき凄い喜びようでピョンピョンはねている。

上条「ああ、よくやったな！・・で、これで通ってもいいよな？」

にとり「ああ、いいよ。でも私もついてくよ心配だし。」

上条「ん・・そうか、分かったよろしくな！にとり！」ぎゅ

にとり「んなっ・・いきなり手を・・／／／」

上条「・・・？」

にとり「にゃんでもにゃい！！／／／」

上条「そ・・そうか」

さとり「はあ、まあいいです当麻行きましょう。」

上条「おう！」

しばらく進むと、危険地帯とされる場所ににとりのあんないで辿りついた。

上条「ここか・・」

にとり「うん、この滝の裏に洞窟があってそこに何かいるって話だよ・・」

上条「いくか！」

さとり「こいし・・！！待ってて・・！！」ぐっ

・・・洞窟・・・

上条「誰もいないな・・」

にとり「みたいだね・・」

さとり「・・・！！？あれは！」たっ

上条「どうした！？さとり！」

さとり「これ・・」スッ

上条「これ・・こいしの帽子・・」上条「って事は、あいつが此処にいた・・・？」

？？「そこで、なにしてるの！！」

上さに「！！？」

三人が振り向いた先にいたのは、これまた少女だった。

上条「カエル？」

さとり「カエルですね・・・」

にとり「いや、カエルでも神様だからね？」

上条「えっ？神様？マジで？」

諏訪子「そうよ！私は神様だよ！」

上条「・・・」

上条は温かい目で諏訪子に近寄る。

上条「あぁ、そうだな・・・立派な神様ですことよ～」ナデナデ

諏訪子「なっ・・・バカにしてるなぁ！！」

上条「・・・」ナデナデ

諏訪子「無言で頭をなでりゅなぁ！！」

上条「・・・」ナデナデ

諏訪子「うぅ～・・・／／／」

上条「なあ・・さとりににとり？」

さとりにとり「なに？」

上条「なんか、この子物凄く可愛いんだけど」

諏訪子「んなっ！何を言うかぁ！！神様に対してその態度はいただけないよ！！」ぷんすか

上条「悪い悪い、ついな。で？何しに来たんだ？」

諏訪子「う～・・コホン！ここは危険地帯なのよ！入っちゃだめなんだよ！！」

上条「あぁ・・もう用は済んだし出ていくよ。悪かったな。」

さとり「こいし・・・」ぎゅ

にとり「すまないね。諏訪子様」

その後、にとりと別れた後さとりは地霊殿に戻った、一週間ほど自由にしていて欲しいと言われた上条は、納得がいかないと思いつつもさとりに何か考えがあるのだろうと思い、行動を起こさないでいた。そこで上条は約束の為とあの黒い妖怪に勝つための修行のために紅魔館に向かった。

・・・紅魔館・・・

上条「いてて・・草木多くて少しすりむいちまった・・・ん？」

美鈴「ん？おや、もしかして貴方が上条当麻さんですか？」

上条「ああ、はいそうです。」

美鈴「上条当麻は入れてもいいとお嬢様に言われてますので、どうぞお入りください。」

上条「ありがとうございます・・え～と」

美鈴「ああ、私は紅美鈴と申します。以後よろしくお願いします」

上条「上条当麻ですよろしくお願いします。」

・・・紅魔館内図書館・・・

上条「さて・・フランはどこかなっと」

パチュリー「妹様なら地下にいるわよ」

上条「おわっと！・・・誰だ？」

パチュリー「パチュリー・ノーレッジこの図書館の管理人みたいなものね」

上条「おお・・そうか、よろしくな。」

パチュリー「で？妹様に会いに行くらしいけど・・死ぬ気？」

上条「いや、一緒に遊ぼうと思って。」

パチュリー「はあ、そんなに死にたいなら身をもって知ってきなさ

い。ここをあれしてこうすれば妹様に会えるわよ。」

上条「ありがとな～」

・・・地下・・・

上条「ここか・・失礼しまーす・・・」ギィイイ

フラン「あ！とーま！遊びに来たの？」

上条「ああ、これから一週間毎日来ることにしたんだ。」

フラン「ホント！！？やったああ！！はやく！はやくお外いこ！！」キラキラ

上条「ははは・・落ちつけよ転ぶぞー？」

フラン「飛んでるから転ばないよーー！！」

ギャー！アハハ！！パキイン！フォーオブアカインド！ゲッマタソレカ！！レーヴァテイン！！ギャー！

レミリア「楽しそうね・・あの子」

咲夜「そうですね・・・今まで見たことがない笑顔ですよ・・・」

パチュリー「ああ、あれが妹様と４時間ぶっ続けで遊んでレミィの所まで来たって言う上条当麻だったのね・・・確かにすごいわ。」

レミリア「そうね・・私だってそんなことできないわよ。」

フラン「あはは！！とーま！あいかわらず凄いね！！ならこれはどうかな！禁弾”スターボウブレイク”！！」

上条「なっ！これは！？やばい！！こんのおおおおおおお！！！！！！！」

上条「うっらあああああああああああああ！！！！！」パキイイイイイイン！！

上条は、大量の弾幕を自分に降りかかる物を見極め的確に消していく。消しきれないものは避けてやり過ごす。

そんな感じで、上条さんは一週間すくすくと強くなっていった。

一週間後

さとり「あと、三日でこいしを見つけないといけないわ！」

上条「ああ！もちろんだ！！」

さとり「この一週間でこいしの場所に大体の見当はついたわ！今から行きましょう！」

上条「どこだ？それって。」

さとり「地底・・ここよ」

上条「ここ！？」

さとり「正確にはここのさらに下、お空の仕事場ね・・今は少し閉鎖してるけど、あそこならだれにもばれない・・」

上条「よし！こいしのやつが待ってる！いこう！！」

・・・灼熱地獄・・・

さとり「こいし！！！」

こいし「お姉ちゃん！！」

上条「さとり！あぶねえ！！」ガバッ

さとり「えっ――――」

ズシャアアアア

ズゥゥゥウウン！！

さとり「――――！！？」

上条「怪我はないか？」

さとり「ええ、ありがとう・・」

黒「がああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！」

上条「またこいつか・・」

??「くくく・・驚いたかな?古明地さとり・・」

さとり「あ・・あなたは・・・!!?」

??「そう、いままでお前に恐怖し怯えていた霊の思いの塊だ。心を読めるお前なら・・分かるだろう?」

思念「われわれは、今までずっと力をためてきた、お前を倒すために!もう恐怖し怯えるのは終わりだ!!」

上条「さとり・・俺があの黒い奴をやる・・お前がアイツをやれ・・」

さとり「ええ、私のまいた種だもの・・わたしが相手よ!!かかってきなさい!!」

思念「ここで、終わらせてやるよオオおおおおおお!!!」

上条「さて・・俺らも始めようか、化け物」

黒「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!」ブン!!

あの時と同じ、上条に向かって尻尾が向かってくる、しかし上条はそれを紙一重で避けガラ空きの尻尾をつかむ。尻尾は戻ろうとして上条を引っ張る形で黒に近づいて行く

上条「おおらああ！！！」バキィ！

上条はその勢いを使って、黒の顔に打撃を与える。

するとパキイン！と音が鳴る、見ると黒の顔が少し欠けていた。

上条「こいつも、同じく思念の塊ってわけかでも統一してるわけじゃなく一つ一つがばらばらに動いてるから殴っても触れていた思念しか消えてないわけか・・なら！！」

上条は、走り出すすると以前吸収していたさとりのスペルカードを放ってきた。しかし

上条「この一週間でその程度なら軽くかわせるんだよ！」

上条はそれを右手一本でかわしていく、そして黒の懐に入ってその胸を殴る、続いて足、羽根等に追撃する、すると黒は片足と胸に穴があき羽根も片方に大きな傷が入る。

上条「おらああ！！」ブン！！

上条はつづいて、追撃しようとすると黒がその羽根で風を引き起こす。

上条「うぐっ」ぶわっ

上条はその風で3メートルほど後ろに飛ばされる。しかし受け身をとってダメージなく着地する。

上条「ちっ、思念がまとまってないからか体が崩れて暴走してんな・・」

上条は、また近づいていくその拳をにぎり雄たけびをあげながら振りぬく―――

上条「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！」

パッキイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！と今までにないおおきな音が鳴り、黒は消滅していった。

上条「ふう・・・」ドン！

上条が一息つくと背後から何かがぶつかるそれは、傷ついたさとりの姿だった。

上条「さとり！？だいじょうぶか？しっかりしろ！」

さとり「う・・とうま・・うぐっ・・逃げ・・て」ガクッ

上条は意識の無くなったさとりをみて何かが頭の中で切れた。さとりをこいしのところまでつれていきこいしの縄を解いて言った

上条「こいし、さとりを連れて逃げろ。後は俺がやる・・！！」

こいし「でも！！だめだよ！とうま！一緒に逃げようよ！！死んじゃうよ！！」ぽろぽろ

上条「大丈夫だ、必ず戻る。だから逃げろ」ニコ

こいし「・・絶対だよ！？絶対戻ってきてよ！？」

上条「ああ、約束だ！」

こいしは、さとりを背負って逃げていく。そこで上条は思念に向き合う。

思念「話は・・終わったかね？」

上条「ああ、お前は許さねえぞ・・」グッ

思念「ふん！来い人間がああああああああ！！！」どばあああああああああ！！

大量の弾幕が上条に襲いかかる。フランの弾幕をかわしてきた上条だが比べ物にならないほどの量だ。

上条「おおおおおおおおお！！」パキイイイイイ！！

しかし上条は恐れる事なく立ち向かいそれをかわしきった。

思念「さとりは皆から恐れられる！ならばそれは消してしまわねばならないだろう！！」

上条「ふざけんな！アイツがどんな思いで今まで過ごしてきたと思ってやがる・・！！皆から嫌われて・・地底のそこで悲しみ続けてたアイツの気持ちが！！自分の考えだけ押し付けてんじゃねえぞ！！」

上条が走り出す、目の前の敵を殴るためにあの姉妹を泣かせないために、拳を握りしめる。

思念「そんなこと知るか！！恐怖の対象何ぞ！消えてしまえば平和になるだろうがァあああ！！」

上条は拳を振りかぶる、目の前に迫る極太の黒い弾幕にそれを叩きつける――――

消えた弾幕を突き抜け、拳を再度握る、そしてそれを目の前の思念にぶつける。

「いいぜ・・お前が恐怖怯えるってんなら・・それであいつらを消そうとするってんならまずは――」

――――その幻想をぶち殺す！！！！！！！！！！

バキイイイイ！！

上条の拳が、思念に突き刺さる。決着がついた――――

思念「ふふふ・・だが、あいつらが恐怖の対象であることに変わりはない・・」

上条「あいつらは恐怖なんか持たれるような奴らじゃねえよ。お前らが勝手に恐れてるだけだ。」

上条「あいつらは、ただの女の子だ。怒りもすれば笑ったりもする。お前らが少し近づこうとすれば、それでいいんだよ。」

思念「そうかな、やはり貴様と私の考えは合わない・・しかし、その考えは心にとどめておこう――っ！！！？」

思念「まずい！！」

上条「どうした！！？」

思念「私の中の思念が暴走し始めている・・・！！このままだと私の肉体は爆発してしまうだろう・・」

上条「何だと！！」

上条「そうだ！右手で――――」

上条が右手で触れようとした時、爆発が起きた――――

・・・1週間後・・・

こいし「お姉ちゃん、怪我大丈夫？」

さとり「ええ、大分直ってきたわ。」

こいし「・・・」

さとり「当麻の・・こと？」

上条当麻は――――帰ってこない・・・

こいし「うん・・とうまあれ以来全く姿が見えないよ・・帰ってくるって約束したんだよ・・？」ぽろぽろ

さとり「大丈夫・・きっと・・きっと戻ってくるわよ・・（そうよ

ね・・当麻・・）」

こいし「うん・・わたしちょっと散歩してくる・・」

さとり「・・・こいし・・・」

～紅魔館～

レミリア「上条当麻が・・！？」

咲夜「はい・・地底で何者かと戦闘の後行方不明と・・」

フラン「とーまが・・！？」

レミリア「フラン！？あんた聞いてたの？」

フラン「とーまが・・そんな・・そんなのウソだあああああ！！！」

・・・地底のある場所・・・

こいし「・・・とうま、帰ってきてよ・・」グス

――――約束しただろ？ちゃんと帰るって

こいし「！！？」バッ

こいしが、振り向くそこには――――

上条「ただいま・・こいし」

上条当麻がいた―――

こいし「あぁ・・あ・・とうま・・！！とうまあああああああああ！！！」ガバッ

上条「はは、こいし大丈夫だったか？心配かけたな・・」ぎゅ

こいし「うわあああああん」ぽろぽろ

こいしを上条は抱きしめた、上条の胸の中でこいしは歓喜の涙を流した。

上条「こいし・・俺さ、お前を助けようとして分かったことがあるんだ・・」

こいし「・・グス・・なに？」

上条「俺は、お前が好きだ―――」

こいし「！！ふふふ、わたしは最初っから大好きだよ？とうま！」ちゅっ

後日談

～fin～

こいし「お姉ちゃん！とうまが帰ってきた！！！」

さとり「えっ！？」

上条「よう、元気そうだな。さとり・・」

さとり「よかった・・ほんとうによかった・・・」ぽろぽろ

上条「まったく・・涙もろいのはそっくりだなお前達は・・」

こいし「あとね！わたし達付き合うことになったの！！」ニコー

さとり「え？本当？」

上条「ああ」

さとりはそれから3日間寝込んだと言う・・・・

～紅魔館～

上条「お～す」

フラン「とーーーーまあああああああああああああああああ！！！」ガバアアアア

上条「ぐふっ！！！？」ドスッずしゃあああああああ！！

フラン「とーま！無事だったの？大丈夫？怪我は？」

上条「大丈夫だよ！ったく、また遊びに来るって約束しただろ？」

フラン「えへへ」

レミリア「無事に生きてたみたいね。上条当麻・・よかったわ。」

上条「おう、おかげさまで」

レミリア「あなたがいなくなったから、フランがどんだけ泣いたか分かる？貴方、これからその罪を償いなさいよ？」

上条「罪って・・はいはい分かったよまた何度でも遊んでやるよ。それでいいんだろ？」

レミリア「それでいいのよ」ニコ

フラン「とーま！！早く遊ぼう！！」

上条「引っ張るなよ！ははは・・・不幸だ・・」ニコ

n～

～後日談ｆｉ

（後書き）

ありがとうございました！多少、はしょったり！最後はもう適当な感じもしたんですか最後まで読んで下さった人は本当に感謝申し上げます。なにせ初心者なもので・・てへへ

これからも、精進していきますんでどうぞよろしくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6388v/

上条「こいしは・・絶対助ける!!」

2011年8月9日06時48分発行